

アステールプラザ

神楽鑑賞会



第一部 神楽誕生の物語

天の岩戸 琴庄神楽団(北広島町)

八岐大蛇 大塚神楽団(北広島町)

天孫降臨 宮乃木神楽団(広島市)

第二部 神楽の戦後70年

滝夜叉姫 琴庄神楽団(北広島町)

紅葉狩 大塚神楽団(北広島町)

大和葛城 宮乃木神楽団(広島市)

プログラム

日時 平成27年5月24日(日)

開場:10:00 開演:11:00 終演予定17:00

場所 アステールプラザ中ホール

全席指定

1階席 3,000円 2階席 2,000円

4/11(土)
発売

チケット販売

アステールプラザ・広島市内の各区民文化センター
エディオン広島本店・ひろしま夢ぷらざ
北広島町観光協会

主催:ひろしま神楽鑑賞委員会・(公財)広島市文化財団アステールプラザ/後援:広島市

第一部 神楽誕生の物語

日本の風土は、四季折々豊かな自然の恵みを私たちの先祖へ授けてくれました。そして、米づくりが我が国へ伝えられるとともに、米づくりを中心とする一年の暮らしが築かれたのです。

春は田の神さまとともに田植まつり。初夏は、稲に付く害虫を川下へ流す虫送り。夏は先祖の魂とともに豊作を祈る盆踊り。秋の稲刈りの後、この一年間五穀豊かな作物を授けてくれた八百万の神々を氏神神社の神楽殿にお招きして、人と神さまがともに喜ぶ宴を開いたのです。神楽は、神々に感謝する農耕儀礼として生まれました。

前半は、米づくりのはじまりと神楽誕生の物語をお楽しみください。

天の岩戸(琴庄神楽団)は、八百万の神々の頂点に立つ天照大神(あまてらすおおみかみ)が、太陽の神さまであり、天照大神こそこの世で一番大切な神さまであることを伝えます。

岩戸の前で踊り狂った鈿女命(うずめのみこと)の舞いは日本の**芸能のはじまり**であり**神楽のはじまり**と言われ、現代では鈿女命は京都の芸能神社へ祭られ、芸能人からの信仰を受けています。

八岐大蛇(大塚神楽団)では、高天原で悪行を重ねた須佐之男命が、長く伸びた髭を切られ、手足の爪を抜かれて罪を償わされた後、出雲の国へ降り立ち、八岐大蛇を退治します。

大蛇を退治すると一本の剣が出てきます。命は、この剣を天叢雲剣(あめのむらくものつぎ)と名付けて、天照大神に捧げます。

これは、**出雲を中心に発展していた古代の鉄づくり=タタラの鉄文化**を受け継ぎ、生産性の高い農具や、武器を作ることによって、後の時代に伝わっていく『米づくり』を広める準備をすることを物語っています。

天孫降臨(宮乃木神楽団)は、神楽では『国譲り(くにゆずり)』の演目の後に続く物語です。

『日本の国を幾千年も豊かな稲穂の実る国にしたい』と天照大神が念願され、自ら高天原で育てられた稲穂を、邇邇芸命(ににぎのみこと)に持たせ、日向の国(宮崎県)高千穂へと向かわせたことを伝えます。

天孫降臨とは**天照大神の孫の邇邇芸命**が高天原=天上界から地上界へ降りられることを言います。

天孫降臨では、天皇を象徴する三種の神器がもたらされたことを伝えていますが、**天照大神が高天原で育てられた稲穂が伝わったことを物語る重要な意味を持っています。**

我が国の米づくりは、天孫降臨の後、神武天皇(初代天皇)などの活躍により、全国各地へ広がっていきます。

第二部 神楽の戦後70年

第二次世界大戦(太平洋戦争)で日本が敗戦国となると、占領軍(GHQ)が日本の歴史・文化などのあらゆる面の統制を行いました。

広島県の芸北地域に根づく郷土芸能の神楽も、天皇を中心とする国家観=皇国史観に基づく芸能であるとして禁止したのです。

そこで、高田郡美土里町(現・安芸高田市)の佐々木順三氏(故人)は、神楽を舞楽、神楽団を舞楽団と改めて、日本の古典芸能の能や歌舞伎などから取材した滝夜叉姫・紅葉狩・土蜘蛛などの新しい演目を創作し、厳しい神楽禁止令の時代を切り抜けたのです。

その後、禁止令は消えていき、神楽競演大会が行われるようになります。

この大会では、**戦後創作された神楽演目が『高田舞い』と言われ**、人気が高まる一方で、古来から伝承されてきた神楽演目の存続の危機が訪れたのです。

この時、戦後間もなく始まった芸石神楽競演大会(昭和23年から現在まで)において、戦前のものを旧舞(きゅうまい)、戦後のものを新舞(しんまい)としてそれぞれ名付けることになったのです。**ここから新舞・旧舞の区別がはじまります。**

戦後約50年が過ぎた頃、佐々木氏は「私が神楽をダメにした」と言われました。

それは、神楽禁止令の出ている中、農村のすばらしい文化の灯を消してはならないとして作られた新しい演目が、発展して神楽競演大会の中心になるようになった頃のことです。佐々木氏が十年以上指導を受けてきた民俗学者が大会を見て、『神楽のような芸能の大会』、数年後さらに『神楽ともいえない芸能の大会』と言ったそうです。

八百万の神々をお迎えし、五穀豊穡を喜び・・・という神聖な神楽のあり様からはずれ、いわゆる**チャンバラ神楽**を観客が楽しむ様子を言ったものと思います。

この頃、一部の神楽団は、神楽は保存的伝承なのか創造的伝承なのかを自問自答して、農村の宮神楽をホール神楽に仕立て、『スーパー神楽』の名で神楽の舞台芸術化を目指していました。

今、日本全国さまざまな分野で戦後70年の歴史を振り返り、より良い未来を築こうとしています。

敗戦によって人々の心が疲弊していたころ、佐々木氏は郷土の風土と歴史に誇りを持ち、神楽という日本人の心の表現に愛情を抱いて『新しい神楽のあり方』を探ったのです。

戦後の広島県の北の神楽が、広島県の伝統芸能として羽ばたこうとする時代にあって、後半の**滝夜叉姫(琴庄神楽団)・紅葉狩(大塚神楽団)・大和葛城(宮乃木神楽団)**では、神楽に賭けた神楽人たちの情念をご覧ください。